

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～5◆

【指導のポイント】

説明的文章における指示語と接続語について学習する。説明的文章ではある事象から著者が推論する事例を主張として展開される。その際、指示語と接続語は事例と主張をつなぐ役割を果たす。また、読み解く上で、要約指示語の内容や接続語の役割を理解することも重要である。接続語をもとに各段落の関係を把握することは、著者の論旨を導き出す最も基本的な読解法と言える。

演習問題Aの板書例

■筆者の主張

今日において、ことばを使った者だけが生き残り、用いられなかった者は消え去ったという推測が成り立つ。

■展開

◇今日なぜ、私たち一種だけが生き延びている事態になったのだろうか

大きな謎↓ネアンデルタール人が消え去ったこと

ネアンデルタール人↓言語×

私たちの直系の祖先↓言語○

言語の使用者⇨生活圏(つきあいの範囲)の飛躍的な拡大

◎ことばの特質：有限の種類のみで無限のパターンを作り出せる

・これにより当人の情動から独立↓メッセージを伝達できる媒体

◇ことばを用いる以前：当人の内的心理状態がナマに近い形で反映

◎「ナマに近い状態」：言語によって伝えられない状態

↓他者との出会いが限定される

・新たな出会いは途方もない緊張を強いる

・恐怖↓攻撃心↓双方の葛藤：加速的に悪い方向へ導く

・自給自足の生活を余儀なくされる

◇ことばを用いた以後：任意の第三者と交渉可能

◎「市場の誕生」：新しい生活の段階

■筆者の主張(まとめ)

多くの近縁種のなかで、人類が唯一生き残ることができたのは、ことばを用いて第三者と交渉するという、新しい生活の段階へ足を踏み入れたからである。

重要語句

○媒体⇨仲立ちをするための機関・手段。

演習問題Bの板書例

■筆者の主張

花と花粉を運ぶ動物は、お互いに利益を得ることで相手を必要としている。

■展開

◇原始的な花(ホオノキなど)：蜜を分泌しない

・昆虫たちと関係の始まり：花粉を餌にしていた昆虫から、体についた花粉が偶然

めしべに受け渡された

・これをきっかけに関係は共進化↓多様化↓次第に精巧なものになっていく

◎花粉⇨植物にとって高価な生産物↓「蜜」⇨経済的で安上がりな報酬

◇安上がりな蜜⇨単なる砂糖水ではない

・蜜にも豊富な滋養分(アミノ酸)が混ぜこまれて

↓ポリネータは引き寄せられる↓送粉に精を出す

◎蝶：蜜から不足がちな窒素分をアミノ酸によって補う

■筆者の主張(まとめ)

花からのおいしい「報酬」によってポリネータたちは誘引され、その恩恵をヒトも蜂蜜などによって受けている。

重要語句

○滋養⇨身体の栄養となること。その食物。

○誘引⇨誘い入れること。いざなうこと。

説明的文章(2)

◆指導ページ P.6～9◆

【指導のポイント】

著者の主張を把握するうえで、事実と意見、具体的内容と要約の区別を理解する。形式段落ごとに文章の要点を捉えることによって、文章構成がより明確になり、主張を整理しやすくなる。また、要旨を把握するためには話題、キーワード、意見や要約が重要なヒントになるので、その内容を理解することが読解のポイントとなる。

演習問題 A の板書例

■筆者の主張

職業には人が生き、家族を支え、子孫に受け継いでいく為の様々な知恵がある

■展開

◇職業⇨幾千もの記憶や感覚などに関する知恵と技が含まれている

※寸分違わぬ製品⇨一人前

◇人が人に技や知恵を伝える方法

◎徒弟制度⇨修業：師・親方(教え・礼節・誠)⇨仕事の重み

↓先輩や親方が身を削って補う

・厳しく、長く、不条理なこともある⇨人間を育てる場所

⇨学校：知識を習得するだけの場所

・失敗を繰り返しながら、感覚を体に刻んでいく

・全てが製品づくりのなかで育まれる⇨実践のみが教育の方法

◇弛まぬ探求心が職人を大きく育てる

・物づくりに究極はない

●少しでも自分らしいやり方を模索する

●他人に優れた物をつくりたい

●常に丈夫さと仕上げの美しさを求める気持ち

■筆者のまとめ

手の仕事は技も、勘も、感覚も、努力なくしては手にできないもの。そして、自らの体に記憶させなければいけないもの。

重要語句

○培う⇨能力や性質を養い育てる。育成する

演習問題 B の板書例

■筆者の主張

話し言葉と書き言葉は本質的に違う。それは、それぞれの言葉に惹かれる理由とも明確に違う。

■展開

◇日本語の特徴⇨話し言葉と書き言葉との区別⇨日本人は意識していない

・外国語にはない別次元の表現⇨明確な違い⇨日本語は「混じり文」

・客観的な答え⇨漢字・平仮名・片仮名等を使い分けできる

・書き言葉としての日本語⇨緊張感⇨文字の歴史に否応なく参加せざるを得なくなる

◇日本の文字の歴史

・日本固有の文字を持っていなかった

・異質な文字(舶来の漢字)を使わなければならなかった

◇日本語のいい意味での不自然さ

・文字の「選択」という過程が常にある⇨日本語の豊かさ

・他の言語にはボキャブラリーの選択があるだけ

■筆者のまとめ

日本語を書くときは、書き言葉のなかに異質なものを感じ、それと常に同化する経験を。そのような経験が生じるのは、書き言葉には文字の「選択」という緊張感と日本語の豊かさによるものである。

重要語句

○土着⇨その土地に長く住みついていること。

【指導のポイント】

小説文は、登場人物の心情や情景描写、表現の特徴などから場面展開をつかむ。各場面の背景、人物、事件が登場人物にどのような影響を与えているのかを押さえながら、登場人物の性格や思想を理解する。特に、場面転換に伴って中心人物の心情変化を理解しているかどうかを問う設問は多い。作品の背景にある著者の思いや主題を把握しながら、描写の特徴に気をつける。

演習問題 A の板書例

■場面

健太と友里が柔道の乱取りをしている

■人物描写

- ◎健太⇨練習生の中で相当強い
- ◎友里⇨健太よりも十センチ背が低い／手足が長い／柔らかそうな体

■情景描写

- (健太⇨友里)
- ・まともに目を合わすことができない
- ・見とれてばかりいる

(友里⇨健太)

- ・目を輝かせている
- ・頬をうつつすら紅潮させている
- ・健太に顔を向けてにっこり笑う

◇健太⇨友里に三度投げを決めようとする…ことごとく返されてしまう

・友里の強さへの驚き、とまどい

・これ以上続けても勝てるとは思えない

◇健太⇨決して調子は悪くはない⇨ニキビ面相手にあっけなく技を決める

・友里が笑う⇨体からすつと力が抜けていく感じ⇨思わず頬がゆるむ

◇組む前から健太は友里に闘志を奪われてしまっている

■主人公の心情

健太の頭の中はすでに勝ち負けどころではなく、友里のことが気になってしょうがない。

演習問題 B の板書例

■場面

リコーダー・アンサンブルメンバーである「私」と西澤が音楽室で練習している

■情景描写

- ◇西澤の吹くりコーダー…男子の音⇨「西澤」の音⇨いい音
- 〈西澤〉人の気配にも気づかず吹いている

〈私〉練習が足りないと感じる

◇西澤⇨私に「アリアを吹いてくれ」と頼む

・「ソプラノ」「バス」という一番離れた音域同士で吹く「アリア」

・不思議な感覚を覚える…違う曲／足りない音が多い／スカスカ⇨西澤は満足

〈私〉うまく吹けない⇨聴かせる演奏ができない⇨感情表現ができない

◇私の本音⇨「ソプラノはお前だから」という西澤の淡々とした発言

〈私〉「正確」である音も、信頼を得られるのならばいいのかもしれない

〈私〉「何がふっきれた」⇨西澤の言葉で自分の長所に自信を持つ

■主人公の心情

西澤の音を聞いているうちに、私の「正確な音」に信頼を寄せてくれるのならば、それも「自分の音」として良いのではないかと思うようになる。すると、これまでの迷いが消え、自分の役割について思い直すようになった。

【指導のポイント】

随筆文は筆者の体験をもとに書かれている。出来事の描写は筆者の主観による部分が多いので、事実の描写方法、感想の表現方法を正確に読み取る。的確に解答を導き出すためには、文章のテーマとなる背景を掴み、筆者の最も伝えたいことを把握する。特に時系列については主題を理解するうえで押さえておく。

演習問題 A の板書例

■テーマ
節目という時の区切りに書き残す文章について

■展開

○日記

○問題点

- ・一日一日が区切り↓間隔が短過ぎて節目というイメージは生まれにくい
- ・書くことが強要され、中断するとすぐに三日坊主と呼ばれ非難される

○節目を示す日記とは？

- ・一定の日数がひと繋がり日記：小学生の夏休みの絵日記など
- ・小学生、中学生、高校生時代の日記：各々の時期の記録として節目を示す

○卒業文集(筆者は、卒業文集とは無縁なので想像)

- ・節目に爪先をかけるようにして綴られる短い文章
- ・その区切りに臨んだ自分の決意や将来の夢を綴った文章を集めたもの

○卒業文集：文章を寄せた各人の個人的表現の束

↓月日が経てば、その筆者の記録として残る

←何かを成し遂げた人：感心する材料になる
悪事を働いたりした人：想像する材料になる

○自分史

・筆者の思い：言葉のわざとらしさに抵抗、なんとなく遠くから眺めていた

←卒業文集と自分史の比較 卒業文集：節目を示す「点」としての表現

自分史：「線」としての表現

■筆者の主張

○様々な時期に様々な形で残された言葉の表現を書いたり読む

↓その人の姿が見えて来る

○老年になって生まれる、幼年時代の絵日記のようなもの

↓何十年もの歳月をじっくり眺めてみたい

演習問題 B の板書例

■テーマ
著者にとっての川風が持つ穏やかさや浄化力

■展開

◇小学生だったわたし：まさことけんかをしている↓気まずい状態

←まさこ：無言だが(わたし)が家にあがることを嫌がってはいない

※おかあさん↓小さい・愛想がよい・とても優しい・人が良さそうな笑顔

まさこ ⇔ ↓大きい・意地悪という部分を強調している

◇まさこ：まだ、けんかのことをおかあさんに話していない

←子どもも自分の中にびったり閉じ込められている存在

○親に相談できる子どもももう大人

・まさこ：不意に立ちあがり引き戸を開けた

↓お互い言葉を交わさずにいることが耐えられなかった

←「涼しい風が一気にさーっと来た」

↓自分のからだか透明になるのがわかった：まさこことの関係が伸直りできたような気分になれたということ(わたし)はそれだけで満足した

◇大人になったわたし：あのときのうつすらとした悲しみは残っている

←思い出すのは川風が吹いたこと(心)が刷新され、颯爽と風がおこった

←言葉のない、風景の一点に比重を移すことで、憂鬱から逃げようとしているのだ
ろうか↓川風には穏やかさがあり、心の塵を払ってくれる浄化力がある

■著者の想い

川風は大人になっても、あらゆる憂鬱をほんの少し軽くしてくれるような風であり、今も自分を支えているような気持ちになる。

重要語句

○刷新＝颯爽

【指導のポイント】

古文、漢文及び漢詩について学習する。古文は、文法や仮名遣いが現代の日本語と異なるので、基本文法を理解したうえで読む。古文の読解法としては、会話文を受ける表現や、省略された主語と述語を補いながら、文と文のつながりや文章構成を捉えることが重要である。漢文、漢詩については返り点と送り仮名を理解すること、漢詩については独特の表現や形式を抑えておくことが必要である。

演習問題 A の板書例

<p>◇物事を多く見てきた「老父」も簡単な解決策に気づかなかった。</p> <p>◇地面に平行／城壁に対して垂直：○</p> <p>◇竿↓・地面に対して水平…× ・城壁に対して水平…×(門の幅が広がった)</p>	<p>■本文</p> <p>長い竿を持ってどうにか城門に入ろうと試みた者が、老人のことばに従うまま、鋸で半分には切ってしまった</p>	<p>2</p> <p>■テーマ</p> <p>簡単な解決策があるにも関わらず、老人の言うとおりに長い竿を半分に切ってしまった者の愚かさを描いている</p>	<p>◇宇治殿↓僧正に魚のおかずをたくさん贈った</p> <p>◇宇治殿↓訳が分からない↓それを聞いた老女房：僧正は修理を寄進しているのではなく、本当は腹が空かしているのだと進言する</p>	<p>◇宇治殿↓家司の様子を見に行くよう命じる：何も見せてもらえなかった</p> <p>※家司は「(僧正が)このような無思慮では帝の後見役はつとまらないでしょう」という旨を宇治殿に伝える</p>	<p>○内容</p> <p>◇僧正↓宇治殿に手紙を差し上げた：経蔵が壊れてしまった</p>	<p>1</p> <p>■テーマ</p> <p>腹を空かした僧正が「経蔵が壊れた」と言って、宇治殿に寄進をせがんだ。それを聞いた老女房が僧正の心を汲み取って、宇治殿に食べ物を贈るよう勧めた。思慮深いとは何かをよく表した話</p>	<p>■本文</p> <p>○いかに…どうして ○かくに…このように ○候ひける…お使いしている</p> <p>○のたまふ…おっしゃる ○つかわす…お贈りになる ○たまはる…頂く</p>	<p>重要語句</p>
--	--	---	---	---	---	---	--	-------------

演習問題 B の板書例

<p>燕のように変わらなずに昔を思い出して戻ってくる人もいる</p> <p>蝶や燕の姿に世の中の有り様を重ね合わせている。人生には移ろいがあるものだが、</p>	<p>◆以前から巣を作っている燕</p> <p>◆主人が貧しくてもまた巣に帰ってくる</p>	<p>◆花が咲く…蝶が集まる</p> <p>◆花がしぼむ…蝶は姿を見せなくなる</p>	<p>2</p> <p>■テーマ</p> <p>蝶は花が開けば集まり、萎めば姿を見せなくなる。燕は主人が貧しくても帰ってくる</p>	<p>◇院↓宗輔公の行いをお褒めになった</p> <p>◇宗輔公↓枇杷を一房取って掲げた↓全ての蜂が取り付いた</p> <p>・蜂の巣が突然落ちて人々が騒いだ</p>	<p>◇宗輔公↓蜂を飼っていた↓世間の人々は役に立たないと言っている</p>	<p>1</p> <p>■テーマ</p> <p>たくさんの蜂が発生して危険だった状況を、宗輔公の知恵によって被害が出なかったので、院がたいそう褒められた</p>	<p>■本文</p> <p>○五月…さつき「ごがつ」と読んではいけない。皐月とも書く</p>	<p>重要語句</p>
--	--	---	---	---	--	---	---	-------------

【指導のポイント】

詩歌の形式と表現技法を押さえ、表現の特色を捉える。表現や情景から作品の心情をつかみ、基礎事項を踏まえたうえで内容を掘り下げて読んでいく。表現技法が詩歌にもたらす効果を意識しながら、作品の主題を理解する。口語や文語など、使い慣れない表現をしっかり身に付けることが正確な内容把握につながる。

演習問題 A の板書例

① 〈形式・表現方法〉

・現代のはなし言葉：口語自由詩

◇倒置法(本来、太字が先にくる)

第二連↓「私は失望していたのだ……鶴のことを」

第三連↓「思い違いもしていたのだ……鶴のことを」

第四連↓「飛んでいたのだ……吹雪のなかを」

・7行目：思い違いもしていたのだ

↓(鑑賞文から)「動物園の檻の中で、餌を与えられて……長い間思っていた」

◎本来、鶴は著者の認識からはるか外れたところを飛んでいた

・13行目：羽もたわわにく飛んでいたのだ

↓14、15行目の文章に係る

・16行目：あの胸をうつ声は

↓(鑑賞文から)「渡りのときは吹雪の中……必死に羽ばたく」

◎鶴の声に野生の力を感じた

②

〈形式・表現方法〉

・短歌：定型(五・七・五・七・七)

◇呼びかけ

「あはれと思へ山桜」

◇擬人法

「山桜」に対して「思ふ」という人間の動作を用いている

◎作者は山でひっそりと咲いている山桜を眺めながら、自分の境遇と重ね合わせている

演習問題 B の板書例

① 〈形式・表現方法〉

・古くからの文章語：口語自由詩

◇擬人法

3行目 どこへすがろ

4行目 探してる

7行目 探しあぐねて

8行目 かんがえる。

10行目 こいしゅうて

◇構成

・第一連から第四連まで文末は七・五調で結んでいる

朝顔の蔓が垣根を越えて伸びていく様子を軽快なリズムで表現

②

〈形式・表現方法〉

A 短歌(和歌)：定型(五・七・五・七・七)

↓夏の日に袖をぬらしつつすくった水が冬に凍り、それが春の風によってにとけたのだろう

B 短歌：不定型(五・八・五・七・七) ↓体言止め 三句切れ

↓山の情景を「しづかさ」という体言で詠み終えている

C 俳句：(五・七・五) ↓倒置法 ・季語：葡萄(秋)

↓葡萄を一語一語を噛みしめるようにして食べる

【指導のポイント】

与えられた資料から情報や事実を読み取れるようにする。ここでは、会話における各人の役割を読み取ることで内容を整理したり、資料の主な目的や工夫を明らかにしたりする。また、表と文章が混在したものに対しても、混乱することなく事実を正確に読み取ることができるようにする。

演習問題 A の板書例

1

■テーマ
運動会のクラス応援旗のスローガンについての話し合い

■会話の流れ

〈松本〉：司会者。応援旗のスローガンやその表現方法について話し合いを促す

○表現方法 1

〈中山〉↓クラスの団結力をアピール

〈吉川〉↓ぱっと見てわかりやすい表現に

〈山野〉↓「一文字」を大きく入れて表現

○表現方法 2

〈中山〉↓リレーをスローガンに入れて表現

2

■テーマ

ウォーキング大会への参加を促すポスターの作成

■資料

○メモ

*前回の反省点↓ポスター作成の中心となる目的

- ・ 未経験者の参加が少なかった↓未経験者の参加を増やす
- ・ 利点が伝わらなかった↓利点をわかりやすく伝える

○ポスターの下書き

◇工夫している点

- ・ 昨年度の写真を掲載して、大会の雰囲気を視覚的に伝える
- ・ 新しく初級コースを設置したことを強調
- ・ ウォーキングは気軽に始められることを説明

◇ウォーキングの利点

- ・ 気軽に始められるスポーツ
 - ・ 病気の予防に役立つ
 - ・ 途中の景色を見て楽しめる
 - ・ 家族やウォーキング仲間との交流を深めることができる
- ◇メモのコースをポスターの下書きした際の変更点
- ・ 各コースにキャッチフレーズをつける
 - ・ 各コースの受付開始とスタート時間をずらす
 - ・ 上級コースの距離を延長

演習問題 B の板書例

■テーマ

消滅の危機にある言語や方言の現状とそれについてどのような対策が必要か

■発表原稿

○関心を持つようになったきっかけ

ニュースでいくつかの方言が消滅の危機にあることを知ったから

○発表者が迷っていること

資料1で方言消滅の対策が必要かどうか「どちらとも言えない」と回答する背景

↓「言葉は生き物である」という考え方

言葉が生まれたり消えたりする自然の流れを変えてしまっているのか

○調査を思い立った動機

資料2の「現状を把握するための調査」が必要という項目を見て

○調査結果

Q1 方言が好きかどうか

・ 地元の言葉が好き、若い人にも使ってほしい

Q2 方言を守るために行っていること

・ 子どもたち向けに方言を使ったお話し会を開くという活動

↓資料2

- ①指導者や後継者の育成
- ②その言語や方言を知ってもらうための催し
- ③地域や民間による方言教室などの取組

方言にまつわるエピソード

・ 孫から、長崎弁を話しているキャラクターのイラスト
↓「新しい形の方言の使い方」を見て、うれしかった

Q3 方言が消滅に向かっていると感じる例

・ 会話の中で使われなくなる言葉がある
↓地元の若い人に意味が伝わらないような言葉が増えてきている

○調査結果を受けて強く思ったこと

・ 地元の方言を残していきたい
・ 伝わらなくなった方言を文字や音声などで記録して残していきたい

【指導のポイント】

単語の分類の仕方を覚え、品詞に分類することができるようにする。ここでは文章を論理の構成から捉え、またさらに自立語・付属語の単位で理解すること。暗記事項も多いが、各品詞と関連づけながら覚えていくとよい。それらを踏まえたうえで条件に沿った意見を述べる作文を書いてみる。

演習問題 A の板書例

1	(1) 断じて ↓ 動詞や助動詞を修飾 ↓ 副詞
(2) 演奏 ↓ 物事を表す ↓ 名詞	(3) こんにちは ↓ 独立語になる ↓ 感動詞
(4) なる ↓ 動作を表す ↓ 動詞	(5) (笑わず) ↓ 活用する付属語 ↓ 助動詞
(6) と ↓ 目的語につく ↓ 助詞	(7) この(こと) ↓ 名詞を修飾 ↓ 連体詞
(8) また ↓ 文と文をつなぐ ↓ 接続詞	
2	(1) ア・イ・ウは助動詞 エ「遠く(は)ない」となるので補助形容詞
(2) ア・ウ・エは格助詞 イ形容動詞「複雑だ」の連用形活用語尾	
3	(1) 線部とウは可能の意味。アは受け身、イは尊敬、エは自発である 線部とイの「の」は「こと」に置き換えられ、体言の代用をする
4	(1) 「言う」の謙讓語。連絡先を言う相手に対して自分を低めている (2) 「である」の丁寧語。丁寧語は、聞き手への敬意を示し、丁寧に言う言葉 (3) 「来る」の尊敬語。「お客様」を高めて言う言葉。「いらっしゃる」は「いる」「行く」「ある」の尊敬語としても用いられる (4) 「拝見する」は「見る」の謙讓語。「見る」の尊敬語は「ご覧になる」
5	①自分の意見を常体で述べる表現にする ②理由を述べるかたちにする ③体言で終えるかたちにする ④結論につながるように意見をあてはめる

演習問題 B の板書例

1	(1) 「誘わ」は動詞で、「れ」「まし」「た」が助動詞 (2) 「幅広く」は使えるにかかり、連用修飾語のはたらきをしている (3) 「やさしく」のみ形容詞で、他は全て活用しないので副詞である (4) 「風の強い」とイ「兄の描いた」の「の」は、「が」に置きかえられる (5) アのみ直前で文節に区切られる。自立語なので、形容詞である (6) 身が高い「殿さま」が動作をおこなっているAは尊敬語、殿さまに対して動作をおこなっているBとCは謙讓語、Dは相手に対して丁寧に述べているので丁寧語 (7) アは「初めて試合に出る」、ウ・エは「兄と弟が試合に出る」とも読める
2	(解答例) 平成二十二年の割合を見ると、小学六年生より中学三年生の方が、毎日朝食を取っている割合が約5%低いことが読み取れる。 私は中学生になると、早朝に部活の練習が毎日あり、よく朝食を取らずに登校していた。そのせいで授業中も集中力が続かず、先生の話が頭に入ってこなかった。こういった経験から、私は朝食の重要性を実感した。中学生になると、勉強や課外活動に時間を多く取られるため、中学生は小学生よりも朝食を抜いてしまうことが多いのだろう。しかし、どんなに忙しくても朝食は一日の活動を支えるために重要であると考える。